

長谷川慶太郎著「インド - 12億の常識が世界を変える - 」

ポプラ社 2010年10月20日刊を読む

世界の架け橋になるインド - 目覚めたインド経済 -

1. たとえば、インドで成功している日本企業の代表格である、自動車メーカーのスズキの鈴木修会長が進出当時から「インドはアジアのながても、西のはずれに位置している。いままではアイソレートされる形でアジアのサプライチェーンのネットワークに入らなかった。しかし、その場所をしっかりと拠点として使うことができれば、我々はさらに西へと行くことができる」と言っている。これはスズキという会社の観点を表した言葉であるが、ここに大きなヒントが隠されている。
2. インドという国は、地理的にはもちろん、人材、資源などの面や市場としても、東ヨーロッパや中東、アフリカへの足がかりとなるのだ。その意味でもインドの重要性は今後ますます大きくなることは間違いない。
3. たとえば中東やアフリカに出ていこうという時に、何のパイプもなかったら、やはり厳しいものがあるだろう。もし、インド人のパートナーが印僑のネットワークを使い、上手く商圈を持っていてくれれば、それを利用できかもしれない。インド人との連携というのがインド国内だけでなく、世界への架け橋にもなる。
4. もちろんインド自体をどうやって使うか、というところを忘れてはならない。日本では、どうしても12億人という巨大なマーケットに対していかにアプローチするか、インド市場においていかに物を売るか、ということばかりに着目してしまいがちだ。だがこれからは印僑をはじめとするインド人との連携こそが、インドの国内市場はもちろん、世界的なビジネスにおいて重要となる局面が増えると予測する。インドと連携して何をするか、あるいはインドが持っている強み、豊富な資源をどう使うか。世界における中国の存在感が増すなか、これからの日本の立ち位置を示していくうえでも、インドをどう活用するかという戦略が鍵を握るだろう。
5. また、おもしろいのが、インド人を日本で使わない企業が増えていることだ。たとえば東南アジアで使うなど、海外の日本企業においてインド人の雇用が増えている。マレーシアのある日本企業では、採用時に日本人とインド人を3分の1ずつ雇い、残りを現地人に行っているという。現地の労働者と日本人との間の中間管理職として、インド人を採用しているのだ。インドネシアはもちろん、タイやベトナム、フィリピン、さらには中東まで、そのような雇用スタイルが増えている。賃金の安さもあるが、なによりインド人の勤勉さは世界のどこでも通用するという証明にもなっている。ビジネスの原則を示して、与えた仕事の範囲をきっちりとこなさせる。アジアで一番それが通用するのはインド人で、次に中国人と日本人が続くというのが世界の評判だ。国によっては、ルール通りにきちんと作業をさせること自体が難しい場合もあるのだ。

6 . たとえば、住友化学がサウジアラビアに作った二つの石油プラントでは、人材確保に苦労していると聞いた。現地では、懸命にサウジアラビアの青年を育てようと採用している。しかし、実際は 1 カ月ももたずに次々と辞めていくというのだ。一体何があったのか？聞けば炎天下の下で酷使しているわけではなく、エアコンの効いたオフィスで働かせているという。仕事に対する感覚が違うのか、やる気を持続させていくこと自体が難しいらしい。そこでも真面目なインド人の出番となるだろう。住友化学は二つのプラントに 2 兆 5000 億円という膨大な投資をして、サウジアラビアの雇用創出という支援目的も掲げていた。しかし、これではさすがに現地の人材よりもインド人を使わざるを得ないだろう。

7 . あるいは、金融危機で世界を揺るがしたドバイでも、インド人の労働力は重宝されている。もともとあまり人がいる地域ではないし、集まっているのはお金持ちばかりで、労働力というものがない。結局、ドバイでも一所懸命に働いているのはインド人ばかりなのだ。世界中で通用するからこそ、世界へ飛び出していくのは必然なのかもしれない。

P90 ~ 93

#### [コメント]

現代世界で最も勤勉で優秀と評されるインド出身者をどのように活用するかで企業や地域、国家の運命が決まる日がやってきたと言える。世界は中国だけでない。インドもあるし、他の多くの国々も存在する。世界中の国々の人々のよさを率直に認め、うまく折り合いをつけながらともに発展するしくみを考え、スキルを身につけることが求められる。

- 2010 年 9 月 29 日 林 明夫記 -